

ショアジギング・ヒラスズキ・磯物ねらい 冬の釣りサバイバル術

水陸両用の保温が大事

15分しかもたない

海中転落対策は浮くためのライフジャケットのみならず、“低体温症”への対策が必要で、夏以外、“約15分以内”で水から上がれるかが実例上、生死が分かれると言っても過言ではありません。

※低体温症になると体が動かなくなり、意識が遠のく(気を失う)しかし、磯から落水した場合、波にもまれたり潮に流されたりで、この15分以内に水から上がることが難しくなります。

この対策としては第一に釣用のウェットスーツを着用することをお勧めします(1万円以下でも出回っています)※助かった実例あり

ウェットスーツほど完全ではないが生存時間を延ばすための服装として身近にあるものでは次のようなものが考えられます。 ※ただし、あまり長くは持たない

■下着は化学繊維を(ヒー○テッ○極暖系など有効) 綿・ダウンは濡れると保温性が低下する

■フリース(化繊)又はウール(羊毛)の中着やズボンを着用し、※頭部や首からの体温発散を防ぐウールの帽子やネックガードを着用、上着は防水・防風性能が高いゴム引きの厚手カッパやゴアテックスのパーカー(手首・足首が閉まるもの)

※人体のうち体温が一番奪われやすい場所が頭部と頸部(首)です

磯ではウェットスーツ+救命胴衣

波に飲まれたときには磯を這い上がった波が底へ底へと巻きこむ流れになるため、ウェットスーツの浮力だけではなかなか浮かび上がれないものです。

溺れないように早く浮かび上がって呼吸をするためにも救命胴衣で浮力を稼ぐ必要があるわけです。

また、落水時を考え、落ちた位置からどちらに泳げば上がれる場所があるか予めチェックしておきましょう。

海中転落生還者の体験談

・今回は磯からのヒラスズキ(波の荒い磯場に生息)ねらいであった。
・ウェットスーツ着用は磯釣りにおける危険事例をインターネットで見、必要であると思い購入した。
・ウェットスーツを着ていなかったらおそらく死んでいたと思う。
・ウェットスーツは釣具店でのつるし売り品で、いわゆる長袖のフルスーツと言われているもので、3ミリ厚のもの。
・その他装備は釣用スパイクシューズ 手袋はネオプレン素材のものにニット帽であった。

・今回、ウェットスーツを着て更にライフジャケット(浮体固定式)をしていたが、やはり波に揉まれたときに、ウェットスーツだけの浮力では足りないと感じた。

・水中では寒くなかった、陸に上がってからの方が寒かった。

・転落後は仰向け、バタ足で泳ぎ、上陸地点に向かった どちらに泳げば上がれるか事前に確認していた。

・大波が来たときは、沖から大きな波が横一線で見えた。

・初めて入る磯であれば、しばらく磯の様子を見て、波がどのように回ってくるか把握してから釣り場に立つが、今回は何度も来ている場所であった為、油断し、確認せず、いつもは立たない危険な場所(岩)に立ってしまった。

・経験上、磯の波の動きは台風通過後などには、うねりの方向や大きさが一定しておらず予想しにくい。



特徴

- ★男鹿半島・能代以北の磯・特にチゴキ崎付近に多く発生
- ★波1000回に1回くらいの割合で発生し、高さ2mを超える
- ★沖から波が来るのが見えるが、たいした波ではないように見える(沖から来た波のエネルギーが浅場で一気に盛り上がる)
- ★食らうと足元から一気にすくわれ、ウォータースライダーのように海中に引き込まれる

事故に会わないために

- ★釣り前に15分以上、磯を良く見て波の動きを把握する
- ★濡れ跡がある場所には入らない
- ★沖から少しでも違った波が来るのが見えたら、すぐに避難する(避難する方向・場所の検討をしておく)
- ★仕掛け回収で避難が間に合わないと感じたらリールをフリーにして逃げる又は竿を捨てる覚悟を!
- ★救命胴衣・海中転落を考えた保温服装・防水携帯を必ず装備(ウェットスーツ推奨・救命胴衣は浮体固定式※を、すっぽ抜け防止のため、また紐等は必ず結ぶ)
- ★スパイクシューズなど防滑装備を
- ※自動膨張式は膨らむまで時間がかかるのと、岩角やフジツボなどでこすれ穴が開くなど、磯場向きではありません

秋田海上保安部



海の事件、事故は海上保安庁電話118番